

8. 五島列島中世史研究のために

—— 編集後記にかえて ——

五島列島と九州本土とのかゝわりは遠く旧石器時代にさかのぼる。五島列島北端宇久島において瀬尾泰平氏による石器の採集は古くから著名であるが、同島マグラ遺跡におけるナイフ形石器の発見や小値賀島玉石鼻遺跡、中通島における久原巻二氏の資料発見、福江島岐宿町茶園遺跡遺物など、遺跡と遺物の発見が増加し、九州本土旧石文化と一衣帶水の関係にあったことが判明している。

縄文時代の遺跡調査は弥生時代の五島列島研究にやゝ遅れたが、やゝ不鮮明であった縄文晚期の五島列島についても水の窪遺跡の調査（1976県教委）、白浜貝塚の調査（1979県教委）によって、五島列島における弥生文化受容前夜の姿に曙光があたり始めた。依然とし縄文早朝と中期の問題は残されているものゝ、遺跡そのものゝ所在については判明しており、調査と研究は今後進められればよいことになる。

五島列島の先史古代の調査と研究の中で弥生時代に関しては最も鮮明にされているといえる。昭和30年代以前における先学の基礎研究の上に立って昭和37・38年における岐宿町寄神貝塚の調査（県教委）以降、人類学上からの研究を含めて急激に進展している。

五島列島史の研究にとって最も資料に事欠いているのは古墳時代遺跡遺物である。上五島の小値賀島の数基の小円墳と稀少な遺物を除いて、他の諸島においては今だに遺物すら発見されていない実状にある。古墳時代に入って小値賀以外に人の足跡が全く途絶えたとは考え難いのであるが、若しそのような事実があり得る条件を考えた場合、自然条件等の急激な変化による生物を含めた環境の変化をも考慮しなければならないだろう。先術の福江市水の窪遺跡においては晩期遺物の包含がローム層に及んでいたこと、同市一本木遺跡の調査においては弥生時代後期の住居跡の上部に火山灰層があったといわれる（小田富士雄氏の教示）。五島列島は火山群が全島を貫いているが福江島の鬼岳火山群の活動による生活条件の劣悪化を仮定すれば、「五島無古墳時代」の仮定もあながち不当とは言い難いのである。たゞ、小値賀島のみに古墳時代が存在し、こまつるぎ 狛劍（環頭の太刀）が奉獻された背景を考えれば大和政権の強大化と対朝鮮半島関係の緊迫化による上五島の重視の可能性もあり、九州本土との関係の変化も考える必要がある。

7世紀以降の五島列島は誠にわかり難い。肥前風土記・日本後記・続日本後紀等にあらわれる五島列島の記事は、海産の豊かな島であるという記載内容があり、燧設置の記事もあるが最も多く見られる記事内容は遣唐船の寄港、新羅人の来寇等、日本の対外関係という背景のもとに「值賀」「遠值賀」等の名が点滅する程度で五島列島自体の歴史や文化をうかがわせる記載内容は少い。ただし太宰府を通じての西北九州支配強化の中に平戸島と五島列島が組みこまれ

ていった9世紀後半になると、やゝ歴史上の五島列島の内容に関する記載も見られはじめる。11世紀後半になると松浦家の五島支配が具体化しはじめるし、鎌倉時代の五島は地頭職の支配地としての歴史上の位置がやゝ鮮明になるのであるが、五島住民の生活や文化については霧の彼方の感がぬぐえないまゝである。

五島の最北端には舜谷寺貝塚（Fig 2）があり、青磁を包含することが確認されている。小値賀島には松浦15代定の開田事業の遺跡（同図）がある、最南端の福江島富江町海岸には倭寇の物資秘匿の基地かとされる「勘次が城」の遺跡があり異様な外見を見せている。これらの中世関係遺跡の調査研究を考えることは、そのまゝ中世における五島列島の歴史と文化を探るうえで重要な位置をしめる遺跡である。

一方、本書の岐宿城のある岐宿町は「貝塚の町」の異称もあるほどに貝塚の多い町である。町外れにある縄文・弥生時代の貝塚を除いて現在の集落の直下に眠っている貝塚については殆んど未調査のまゝである。宇久島の舜谷寺貝塚の例もあり、岐宿町内の貝塚から磁器が出たことの口碑もある。こうしてみると、現在の岐宿町の集落下に眠る貝塚群は、案外、現在まで不明のまゝになっていた古墳時代以降、中世に至る五島列島、殊に下五島の文化史に曙光をあてるものとなる可能性を秘めている。